

# ゲルスタ・ユリアさん

（東北大学災害科学国際研究所）

## 戦争、そして災害の記憶の継承に必要なもの

日本は地震をはじめ災害が極めて多い。さらにこの約二〇〇年の間に四回も戦争をしている（日清・日露・第一次世界大戦・アジア太平洋戦争）。結果として膨大な死者を出してきた。私たちは、こうした「負の遺産」ときちんと向き合っているといえるのだろうか。負の記憶の継承と、「コミュニティの復興を研究するゲルスタ・ユリアさんに聞いた。

### 加害者がいる戦争、いない災害

——三・一一で被災したコミュニティの記憶の継承について研究されています。きっかけを教えてください。

私が生まれたドイツには、ナチス時代の暗い記憶が山のように残されています。街にナチス時代を知ることができるミュージアムやモニュメントがあるだけではありません。街のあちこちにある壁や塀に小さなプレートが埋め込まれています。そのプレートには、ナ

チス時代に虐殺されたユダヤ人や同性愛者、障害者たちの名前と誕生日、収容所に連れ去られた日、殺された日が刻まれています。ある日突然、この街でふつうに暮らしていた人たちの日常が奪われる。街で暮らす人や観光で訪れた人が、自分に置き換えて共感し、受け止められるような仕組みができています。

ただし、意識しなければ、犠牲者の名前が刻まれたプレートもただの石と同じように日常に埋没してしまいます。私自身もそうだったかもしれませんが。子どもの頃は、ドイツの歴史にさほど関心を持っていませんでしたから……。

そんな私が戦争の記憶——そして東日本大震災の記憶の伝承に目を向けるきっかけになったのが、日本への留学でした。ベルリン自由大学で日本学を専攻していた私は、二〇一一年に留学中の東京で東日本大震災に遭遇しました。地震と津波、さらに原発事故も起きた大規模な複合災害から日本はどのように立ち上がるのか、復興のプロセスにとっても関心を持ちました。それに日本は歴史上、たくさんの災害に見舞われてきました。その教訓や記憶はどのように継承されてきたのか、とても大切なテーマだと感じたのです。

——実際に調査をはじめて、どんな問題意識を持ちましたか？

最初は、交換留学先だった上智大学大学院のデビッド・スレイター教授のもとで、東日本大震災で被災した人々へのインタビューのデジタルアーカイブを作成しました。ほぼ毎週末に夜行バスで東北に通って聞き取り調査を行って、月曜日の一限の授業までに東京に戻ってくる生活を続けたのです。

そんななかで気づいたのは、災害の死は社会的、政治的な側面があるということです。もしも大きな地震や津波、噴火が発生したとしても、犠牲者が出なけれ

ばただの自然現象です。しかし犠牲者や被害が出たときにはじめて災害になり、社会的、政治的な問題になる。なので、社会学では地震や津波を「ハザード（危険）」と呼び、「自然災害」は存在しないという考え方があります。きっかけは自然現象だったかもしれないけど災害になるのはほぼ自然ではないからです。国や自治体の防災への取り組みはしっかりと行われていたのか、建物は丈夫につくられていたのか、行政の支援政策は十分だったのか。では、その災害から何を教訓にし、防災についてどう考えていくのか。

そこで重要になってくるのは、当事者の記憶です。ただし、災害では、ほとんどの場合は戦争と違って明確な加害者がいないように見えます。その影響なのか、記憶の継承という問題意識が希薄になってしまっているのかと考えるようになりました。

### 「主語がない伝承」と「議論なき暗記」

——記憶の継承において、日本とドイツにどのような違いがあるのでしょうか。

興味深かったのが、広島平和記念資料館を見学した